

琉球大学学術リポジトリ

サンパウロ市における沖縄県系人の四十九日のミサ

メタデータ	言語: 出版者: 琉球大学国際沖縄研究所移民研究部門 公開日: 2018-11-13 キーワード (Ja): 四十九日のミサ, サンパウロ, 沖縄県系人社会, 沖縄の民間信仰, ユタ的霊能者, São Paulo キーワード (En): Mass of Shijyukunichi, Uchinanchu community, Okinawan Folk religion, Yuta 作成者: 浜崎, 盛康, Hamasaki, Moriyasu メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.24564/0002010125

サンパウロ市における沖縄県系人の四十九日のミサ

浜崎盛康

- I. はじめに
- II. 「ASSOCIAÇÃO ESPIRITA」とユタ的霊能者 IO さん
- III. SH さんの四十九日のミサの概要
- IV. 考察
- V. 終わりに

キーワード：四十九日のミサ, サンパウロ, 沖縄県系人社会, 沖縄の民間信仰, ユタ的霊能者

I. はじめに

2009年9月6日～9月23日にかけて、ブラジル国サンパウロ市において、沖縄県系人を中心に、沖縄の伝統的な民間信仰の儀礼等がどのような現状にあるのかということを中心に聞き取り等の調査を行った¹⁾。期間中の9月17日（サンパウロ市の時間（以下ブラジル時間という）9月16日）に、沖縄県系人の死後四十九日のミサ（missa²⁾）があり、立ち会うことができた。このミサには県系のユタ的霊能者³⁾が関わっており、これはサンパウロ市の沖縄県系人社会において、沖縄の民間信仰がどのように継承されているかを示す貴重な事例の一つであり、ここに報告し若干の考察をほどこしたい。

II. 「ASSOCIAÇÃO ESPIRITA」とユタ的霊能者 IO さん

本稿のテーマである「沖縄県系人の死後四十九日のミサ」に関連して、確認しておきたい宗教結社がある。サンパウロ市のビラ・エマ（Vila Ema）地区に、沖縄出身のNHさんが創始した「ASSOCIAÇÃO ESPIRITA “AMOR A JESUS”（“イエスへの愛”心霊協会）」という宗教結社である⁴⁾。NHさんは既に亡くなっており、娘さんがその後を継いでいる。この結社の中心メンバーの一人に、ユタ的霊能者 IO さん（女性 60 代）がいる。IO さんも沖縄県出身者であり、他の沖縄県系のユタ的霊能者 MH さん（女性 60 代）とペアでよく活動しているようである。9月15日（ブラジル時間9月14日）にこの ASSOCIAÇÃO ESPIRITA の集会に参加することができた。この集会においても IO さんと MH さんは絶えず協力し合っていたが、III で見る SH さんの四十九日のミサも 2 人で執り行っている。

この ASSOCIAÇÃO ESPIRITA は、多様な宗教的要素が混淆している。大橋が述べているように、祭壇の構成がそのことをよく表していると言えるだろう⁵⁾。向かって右から、ドニゼッチ神父（キリスト教）、キリストの画像と十字架のキリスト像（キリスト教）、中央に褐色の聖母マリア「ノッサ・セニョーラ・アパレシーダ（Nossa Senhora Aparecida）」

(ブラジル・キリスト教), その左にアマテラスオオミカミ(観音?)と神武天皇の画像(日本), 伯父コーキチの写真(沖縄)と並んでおり, 中央のアパレシーダ像の右下には黒人(パイ・ジョアン?)の像(ブラジル), 左下には幼くして亡くなった妹(沖縄)の写真が祀られている。このように, このASSOCIAÇÃO ESPIRITAは, 沖縄的な要素を色濃く受け継ぎながらも, 日本, ブラジルのいろいろな要素が習合している。

そのようなASSOCIAÇÃO ESPIRITAにおいてIOさんは中心メンバーの一人であるわけである。我々が参加した集会においては, 祈りがあり, 中心的な信者であるメジウン(medium 霊媒)たちに次々と霊の憑依(降霊)があつていろいろと語りだし, また, 除霊があり, 希望者に対する相談の時間等があつた。その相談の時間に我々は前に呼ばれて, 10数人のグループ(Ⅲで見るトートーメーと四十九日の相談に来たH家の人々)の相談に立ち会つた。このグループは, 短期間に身内が続けて亡くなったことで相談にきており, 位牌を持ってきていた。IOさんがその位牌を調べ, いろいろな不備な点を指摘する。その結果, 位牌を新しく作り直した上で, 亡くなったSHさんの四十九日のミサを執り行うことになった。そして, 我々もそのミサに招待されたのである。

Ⅲ. SHさんの四十九日のミサの概要

SHさんは沖縄本島の中部の出身であり, 14歳の時にブラジルに移民として渡り, 5人の子供をもうけた。2009年7月に85歳で亡くなっている。SHさんの四十九日のミサはサンパウロ市のペーニャ(Penha)地区にあるご自宅で営まれた。我々は, この法事に立ち会うことができた。SHさんの奥さんも, 旦那さんの死後心身の調子を崩し, 病気で2009年9月に亡くなっている。不幸が続いたのである。

SHさんはユタ嫌いであつたということであるが, 奥さんはそうでもなく, ご主人のSHさんが亡くなったとき, ユタ的霊能者のIOさんに相談に行こうと言つていたとのことである。しかし, 奥さん(母親)も亡くなり, SHさんの子供たちや親族はどうしていいかわからず, 結局, 総勢13人でトートーメーの祀り方に何か問題はないか等, ASSOCIAÇÃO ESPIRITAに相談に来たのである。既に述べたように, ここで, 子供たちや親族は霊能者のIOさんから, トートーメーに関していろいろな不備を指摘され, 新しく作り替える必要があるとアドヴァイスされたわけである。四十九日までにトートーメー(本位牌)を新しくして, 亡くなったSHさんに現在のシルイーフェー(白位牌)から新しい不備のないトートーメーに移ってもらうのである。そして, その四十九日のミサをIOさんとMHさんが中心に執り行うことになったのである。

1. 四十九日の供物

さて, 新しいトートーメー(沖縄位牌である)ができあがり, 四十九日当日を迎える。

我々が午後3時頃SHさん宅に到着したときには、既にシルイーフェー（白位牌）の前に多くの供物が供えられていた。供物については、親戚のAさん（女性50代か）が説明してくれた。重箱がないということで、代わりに皿やトレイに供物を盛りつけたということである。皿やトレイは、計18あり、シルイーフェーの前に、ずらっと並べられている。以下いくつか、特徴的な点を見ておきたい。

- ・シルイーフェーの前、中央には三枚肉等7種類の食べ物が入ったトレイが2つと、ムーチー（餅）がはいったトレイが2つあり、ムーチーの数は7個ずつの3列で21個である。これらの4つのトレイの配置は、いわゆる「田文字」の形になっている。供え物の三枚肉は皮の部分を上にして供えている。Aさんは、法事の場合は皮は上で、お祝いの場合は皮は下にする다고 教わったと述べており、これは沖縄の一般的な習慣と一致している。また、しばらくすると、各皿とトレイの食べ物をそれぞれ3つないし4つほど、箸でひっくり返すということをおこなっている。

- ・供物には、線香をつける前はサンをのせ、線香をつけた後はサンを取る。サン（魔除けの意味がある）をのせておくのは、いろいろな霊が供物を食べに来るので、それを防ぐためであるという。

- ・供物はウサンデー（御下がり）して皆で食べるが、これとは別に、各皿、トレイから一つずつ食べ物を取り、そしてそれをまとめて別の皿に入れる。これは食べずに、死者に持たせるためのものとなるということである。

- ・四十九日の供物として特徴的なものの一つに49個の餅があるが、SHさんの場合にも、丸い皿に49個の餅が平たく盛りつけられている。IVで考察するように、これは人間の体、49の骨を表したものである（この49個の餅については、IOさんらも後で同様の説明をしており、作って供えたか確認している）。

- ・皿に米を敷き、その上に本物のコインを7枚入れてある。これは供物で不足がある場合そのお金で買ってくださいという意味だということである（この点についても、同様の説明をIOさんが行っている）。これは、沖縄ではあまり一般的ではないだろう。

2. 四十九日のミサ

夕方、IOさんとMHさんが到着し、四十九日のミサが始まる。IOさんとMHさんは、シルイーフェーの処置、新しい位牌の札の並べ方等いろいろ指示し、マブイワカシ（魂分かせ）も行っている。ここでも、以下特徴的と思われることをいくつか見ておこう。

- 1) IOさんはMHさんとともに、新しい位牌の札を正しく並べ直す。新しい位牌には四十九日を迎えたSHさんの名前が書かれた札がまだ入っていない。今日から

SHさんは、シルイーフェーからトートーメーに移るわけであり、新しい位牌に名前の書かれた札が入れられる。それでもって、SHさんは仏壇に移ることができるようになるのである。

- 2) IOさんは、ナイフで古い位牌の部分部分を削り、その削った薄い木片を焼いている。小さい瓶に液体燃料が入れてあり、それを振りかけて、IOさんはマッチで火をつけて燃やしたのである。

この古い位牌の台座には左右に2つの小さな獅子(のような)魔除け(?)が、釘で打ち付けてあった。IOさんは、釘を使ってあることで歩けず、誰か足が痛い、腰が痛い等ということになると述べ、位牌には釘を使ってはならないとしている(この指摘は次のシルイーフェーの場合も同様である)。また、この魔除け(?)は、かえって逆に先祖の霊に悪い影響を与えているとも述べている。

- 3) シルイーフェーは四十九日までのもので、今日焼くことになる。今日からはSHさんを仏壇に移すのである。この点は、シルイーフェーは沖縄でも仮位牌であり、沖縄の一般的な考え方と一致しているだろう。

ところで、IOさんによれば、SHさんのこのシルイーフェーには、2つの問題点がある。一つ目は、位牌の角がとがっていることである。ウチナンチュは、「クヌユワタティ、カドゥヤイジャスナ(この世渡って、角は出さないで)」と言う。角がとがっているのは物事がスムーズに行かなくなってしまうということのようである。二つ目は、位牌の台と札板との固定に釘が使われていることである。前項で見たように、位牌には釘を使ってはならず、釘を打ってあると歩けないとのことである。

- 4) IOさんによれば、SHさんは四十九日の今日から仏の道に入る。SHさんを〔あの世へ〕送り出すことをウークイ(お送り)という。SHさんへの供物から分けた食べ物が2つのトレイに入れられ、依然供えられている(他の供物はほとんど片づけられている)。これは、SHさんが他のさまよっている霊とぶつからないためであるという。つまり、そのような霊がやってきても、2つのトレイの食べ物を食べている間に、SHさんは静かに先祖のもとにいけると言うのである。

しかし、四十九日に故人の霊をあの世に送り出すことを「ウークイ」と言っている点、四十九日にさまよえる霊のために食べ物を用意するという点は、沖縄の一般的な習慣とは異なるだろう。ウークイは、沖縄では一般的にはお盆の旧暦7月15日の「お送り」のことである。また、さまよえる霊のための食べ物、あるいは

は先祖の霊がグソー（後生、あの世）へ戻るとき邪魔をされないように、さまよえる霊に食べ物を用意するという習慣も、沖縄のお盆の「ミンヌクー（「水の子」⁶⁾）」を思い出させるだろう。ミンヌクーは、一般的には、「ウークイ（盆の送り）の日に砂糖キビや、野菜の切れ端を小さな小皿に入れて仏壇に供える。ミンヌクーは、供えたご馳走や、飾り物にトゥムゾーロー（供精霊）、無縁仏や悪い霊が手を出さないようにということ供える。」⁷⁾ものである。

- 5) 四十九日の最後に、SHさんの長男を始めとして参列者全員（約50人ほど）がトートーメーに3本の線香（沖縄のヒラウコー（クルウコー）は貴重品で、ブラジルでは一般的に本土風の線香を使用しているようであり、この場合もそうである）をあげる。香炉が線香で一杯になる。仏壇を置いてある部屋はそれほど大きくはなく、線香の煙で鼻やのどがおかしくなるほどであった。次のIVで詳しく考察するが、そのような中全員の焼香が終わると、IOさんがポルトガル語を中心に沖縄語（ウチナーグチ）と日本語を時折交ぜながら、トートーメーに祈りを捧げ始める。MHさんはいすに腰掛けて、トートーメーの正面にすわっている。IOさんはその横に立っている。10数分後、MHさんに異変が起こり始める。亡くなったSHさんの霊が、MHさんに憑依したということのようである。SHさんは、MHさんの口を借りて、四十九日のミサに対する感謝を述べ、子供たちや親族と別れ、旅立っていったのである。子供たちや親族の方々の目からは涙がこぼれていた。

IV. 考察

ブラジルの沖縄県人社会においては、多少地域差はあるようだが、県人会の活動が活発であり沖縄の伝統を守ろうという意識が顕著である。四十九日のミサも沖縄のやり方を意識しているようである。

沖縄の四十九日の法事で一般的に特徴的と思われること⁸⁾のうち、以上見たサンパウロのSHさんの事例と比較して特に興味深いと思われる、「1. 49個の餅」と「2. マブイワカシ」の2つについて確認し、比較、検討してみたい。

1. 49個の餅

沖縄で四十九日の供物の中に、一般的だと考えられているようだが、49個の餅がある。その餅は団子状の小さな餅48個と、1個はチブルムチ（頭餅）と言って他よりも大きめである。49というのは、人間の骨が49あるからだとされている。その内で、頭の骨が大きいと考えられており、頭を表す餅も一つだけ大きめだというわけである。さらに、

ヒサムチ（足餅）と言って、細長い餅を2つ加えることもあるようである。その場合は、チブルムチ1個、ヒサムチ2個、その他の餅46個ということになる。これらを重ねて置き、頂点にチブルムチを置くのである。酒井によれば、この49の餅は「忌明けの食い別れの餅」の意味があり⁹⁾、皆で分けて食べる習慣がある。

さて、サンパウロ市におけるSHさんの事例でも、四十九日の供物の中に49個の餅が供えられていたことは、Ⅲで既に述べたが、もう少し見てみよう。

SHさんの親戚のAさん（特に霊能者というわけではないが、供物に関して詳しく、見聞きして覚えたということである）によれば、四十九日のミサの時だけ49個の餅を供える。49という数は人間の体の骨の数を表し、そのうち1個は少し大きめで「頭」(cabeça)を表し、残りの48が体の骨(ossos do corpo)を表している。同様の説明はIOさんも行っている。SHさんの親族はウガングトゥ（御願事）等があるとIOさんに依頼しているようであり、Aさんもその知識の多くはIOさんからのものであるかもしれない¹⁰⁾。49個の餅は丸いさらに平たく入れられ、重なっていない。中央に「頭」を表す少し大きい餅が置かれている。この餅はシルイーフェと供物をかたづける際に、四十九日のミサに参加している人々に分け、みんなで食べている。

このように見てみると、サンパウロ市における事例と沖縄の一般的な習慣、考え方がきわめて類似していることが確認できるだろう。餅の数が同じであること、餅が人間の体の骨を表していること、その中の一つが「頭」を意味し少し大きめであること、そして、これを参列者に分けてみんなで食べていることが同一である。違いは餅の置き方（重ねるか並べて重ねずに置くか）ぐらいである。

2. マブイワカシ（魂分かせ）

1) 沖縄では四十九日（あるいはその翌日等）に、マブイワカシの儀礼を行うことも少なくない。マブイワカシとは、確認すれば、高橋によれば「死者とイチミ（生きている人）のマブイを分ける儀礼。四十九日の焼香の夜に、死霊が現世に未練を残さないように慰めて安心して後生に行くように御願すること」¹¹⁾である。死後49日間はシニマブイ（死者の靈魂）が、未だグソー（後生、あの世）に往けず（往かず）、現世にとどまっている（グソーと現世を行き来している）と考えられている。そこで、四十九日にシニマブイがグソーに往けるように、マブイワカシを行うのである。マブイワカシにおいては、ユタがシニマブイを呼び出して自らに憑依させ、死者の思い等を語らせるのである。櫻井に拠れば、マブイワカシにおいては（沖縄本島中部における事例¹²⁾）、「ユタがきて口寄せを実修し、そのなかでユタが死者になり代わって生者との別れを告げる。……この告別の辞は、死因とか家の事情や死者の境遇等により雑多であるが、述べる趣旨内容にはおよそのパターンが存在する。まず、何故に自分は死ななければならなかったかという運命物語が前半を構

成する。そして、あの世に往くに当たって気懸かりなことについて善処方を要望し、それでは永遠のお別れだあととはよろしく、いざさらば、という決別の部分が後半となる。」

2) サンパウロの SH さんの事例においても、Ⅲで簡単に見たように、四十九日の焼香の後に SH さんの霊を呼び寄せ、MH さんに憑依させ、SH さんに思いを語らせている。あらためて、詳しく見てみよう。

まず、焼香について確認すると、SH さんの長男を始めとして参列者全員 (約 50 人ほど) がトートーメーに 3 本の線香をあげている。我々も、焼香するように言われ、焼香を行った。IO さんは自ら線香の火をつけて、参列者に手渡している。既に述べたように、仏壇を置いてある部屋はそれほど大きくはなく、線香の煙で鼻やのどがおかしくなるほどであった。

全員の焼香が終わると、MH さんがいすに腰掛けてトートーメーの正面にすわる。IO さんはその横に立ち、ポルトガル語を中心に時折沖縄語 (ウチナーグチ) で、また日本語も少し交ぜながら、トートーメーに祈りを捧げ、淀みなく語り始め、その後マブイワカシが行われた。それは約 20 分程度であったが、以下に要約の形で報告したい¹³⁾。

IO さん: [ポルトガル語] まず、H 家の先祖 (o raiz tronco) を呼び招きましょう。私たちは (木の) 枝であり、葉です。仏壇 (butsudan) はそれぞれの家の伝統です。宗教は変えることができて、仏壇は私に流れている血 (sangue) であり、変えることはできず、とても大切です。血 (筋) を大切にせず、根を踏みつけると、実は腐ってしまい、子孫は繁栄できません。

おじいちゃん (ojiichan) の靈魂 (espírito) は、今日 (新しい仏壇の) ウコールへと移り、名前も白い文字の書かれたもの (新しい位牌?) に移りました。新しい世界 (um mundo novo), スピリチュアルな道 (o caminho espiritual) を彩り (colorir) 始めるのです。この人は新しい道を学びながら、上っていきます。……おじいちゃんは、今日皆さんと別れていきます。

[沖縄語 (ウチナーグチ) になる]

ヤーニンジュスルティ (家族そろって), SH オジイガシジュウクニチウワティ (SH おじいの四十九日終わって), ブツダンカイワタスルトクマヤイビーグトゥ (仏壇に渡すところですので), チューヤカミサマヌメイレイウキティ (今日はカミ様の命令を受けて), マタ (また), ムートウヌカミガミサマヌヒカリサーニ (先祖のカミガミ様の光で), オジイサンウンジュ (おじいさんあなた), チューウカラヤウヤファーフジトゥマジュンド (今日からはご先祖と一緒にですよ)。

儀礼がこのあたりまで進むと、MHさんに異変が起こり始めた。手を合わせ、シュツ、シュツと鋭い音を発し、少し苦しそうである。亡くなったSHさんの霊が、MHさんに憑依したということのようである。SHさんは、MHさんの口を借りて、およそ次のようなことを語る。

SHさんの霊(MHさん): [日本語と沖縄語(ウチナーグチ)で]

海山越えて……H(家)のムートゥヌ(先祖の)おじいでごじゃいます。ありがとうございます。チュウヌシンジュウクニチウワティ(今日の四十九日終わって)、マジュン(一緒に)、マジュン(一緒に)、ウケトウイガ(受け取りに)、オジイ(おじい)、ニフェーデービル(ありがとう)、クワウマグワ(子供・孫)、ウヤファーフジガナシー(ご先祖様)、ナガリトールチャチャータカラムン(流れている血はいつも宝物)……ありがとう、ありがとう、ジョウトウ(上等)、ジョウトウ(上等)……

IOさんは、「子や孫に何か一言あれば、子供や孫に言ってください」とSHさんに呼びかける。SHさん(MHさん)は、何も話さず、少し苦しそうにしながら、泣きだす。IOさんが子供たちや親族に、「ここに来て、手をつないで、いつもしていたように話して」といい、子供たちはMHさんを取り囲むようにして手をつなぐ。皆涙を浮かべ、泣き声になっている。そのような中、次のような言葉が聞こえてきた。

SHさんの子供: お父さん、幸せに、休んで……あなたは世界で一番すばらしいお父さんでした(Você foi o melhor pai do mundo.)。いつも私の思い出の中にいます(Sempre vai tá na minha lembrança.)。

そのように、子供たちや親族に囲まれ、見守られながら、SHさんは、トートーメーへと移るべく、旅立っていったのである。

3) 以上のようにサンパウロのSHさんの事例においても、マブイワカシは未だ現世にいるSHさんの霊を、あの世(ウコール、トートーメー)に送り出す意味があることが分かる。1) で見たように、高橋の説明は、「四十九日の焼香の夜に、死霊が現世に未練を残さないように慰めて安心して後生に行くように御願すること」であるが、SHさんの事例は、基本的にこの説明がよく当てはまるように思われる。

この事例でも、四十九日の焼香の夜に行われており、IOさんがSHさんの霊に、「チュウカラヤウヤファーフジトウマジユンド（今日からはご先祖と一緒にですよ）」等と述べ、SHさんにこの儀礼でもって現世に別れを告げ、ウヤファーフジ（先祖）のもとへ移り行かねばならないことを、いわば納得させている。SHさんの霊も、それを理解し、子供や孫たち、親戚一同に、何度も感謝の言葉を述べ、旅立っている。「お父さん、幸せに、休んで……あなたは世界で一番すばらしいお父さんでした。いつも私の思い出の中にいます。」という最後に見た子供の言葉は、これ以上ない慰めの言葉であろう。

しかし、櫻井のあげている事例と比較すると、前半の「なぜに自分は死ななければならなかったかという運命物語」は語られていない。後半の「あの世に往くに当たって気懸かりなことについて善処方を要望」することもなく、「それでは永遠のお別れだあとにはよろしく、いざさらば、という決別」の部分が主であったと言えよう。

V. 終わりに

ブラジルの沖縄県系人社会においては、一般的に言って、沖縄の伝統を守ろうとする意識が強いように思われる。沖縄語（ウチナーグチ）が沖縄よりも日常的に話されており、若い人たち向けに沖縄語（ウチナーグチ）の講座が開かれたりしている。また、三線（サンシン）やエイサーはブラジルでも人気がある。自らのルーツに対する意識が強いのである¹⁴⁾。

それは、今回の四十九日に関する調査でも感じられた。位牌を大切にすること、四十九日の考え方、シルイーフェー、49個の餅、サンの使用、マブイワカシ等、沖縄と共通する要素が多く見られた。また、本稿では触れなかったが、ヒヌカン（火のカミ）も調査した家庭には普通に見られ、多くの県系人がヒヌカンを祀るのはごく当たり前のことであると語っていた。ブラジル（サンパウロ市）の沖縄県系人の社会においては、沖縄の民間信仰が生活のいろいろな場面で現に生きているのである。

ブラジルの沖縄県系人社会において、沖縄の民間信仰がどのように受け継がれ、どのように変容しているのか、あるいは変容していくのか、引き続き調査が必要であると思われる。

付記

今回の調査では、現地サンパウロで、沖縄県人会の与儀昭雄会長を始めとして多くの沖縄県系の方にお世話になった。不慣れな地での調査は、その方々の協力なくしては、不可能である。記して、深く感謝いたします。

注

- 1) 本稿で考察する四十九日のミサの調査を行ったのは、執筆者の浜崎盛康（琉球大学教授）、山里純一（琉球大学教授）、赤嶺その子（サンパウロ市現地研究協力者）の3人である。四十九日の法事の様子は、浜崎と山里教授がそれぞれビデオに録画した。本稿を執筆するに当たっては、山里教授からその貴重なビデオ映像を提供していただきました。記して感謝いたします。
- 2) 現地の県系の人たちは、四十九日のミサ (missa) という言い方もしている。本稿でも、「四十九日」、「四十九日の法事」、ないし「四十九日のミサ」という言い方をしておく。
- 3) IIで見る ASSOCIAÇÃO ESPIRITA の性格を考えると、IO さんを沖縄で言うユタと呼ぶには躊躇する面もある。この点については、さらに詳しい調査が必要であると思われる。したがって、本稿では仮に「ユタ的霊能者」と呼んでおく。
なお、ブラジルでもユタという呼称は、沖縄と同様にあまり好まれない面があるようである。今回の調査で、現地の研究協力者の赤嶺さんに、ユタの人へのインタビューをしたいので、アポイントメントを取ってくれるようお願いしたが、苦勞したようである。というのは、評判やロコミを頼りに「ユタ」の人に電話等で依頼すると、「私はユタではない」という返事が多く返ってきたというのである。実際、ASSOCIAÇÃO ESPIRITA で、筆者がユタという呼び方について訊ねたときもあまり肯定的な返事は帰ってこなかった。
- 4) 「ASSOCIAÇÃO ESPIRITA」は、沖縄の民間信仰とキリスト教的な要素、心霊主義的要素、アフリカ系の宗教的要素等が習合しており、非常に興味深い。稿を改めて論じたい。なお、大橋英寿（平成10年）の第10章「ブラジルにおける沖縄シャーマニズムの展開」に、この「ASSOCIAÇÃO EAPIRITA」についての調査報告があり、また森幸一、2002にも関連する記述がある。
- 5) 祭壇構成については、大橋英寿、p. 645 参照。大橋の掲載している写真とは、現在は若干配置が異なっている。
- 6) ミンヌクーが「水の子」であることについては、国立国語研究所編、平成13年、半田一郎編著、1999、高橋恵子、1998 参照。なお、沖縄語（ウチナーグチ）に関しては、必要な場合には、これらを主に適宜参照した。
- 7) 高橋、p. 294.
- 8) 四十九日の一般的に特徴的な儀礼については、たとえば、櫻井徳太郎、昭和48年、pp. 165-171、酒井卯作、平成13年、pp. 352-354、平識令治、1995、pp. 112-113、また一般向けのものとしては、帰依龍照、2007、pp. 164-184、むぎ社編、2007、pp. 80-87 を参照。

- 9) 酒井, p. 353.
- 10) ブラジルの沖縄県系人の社会において、沖縄の民間信仰の様々な儀礼がどのように伝えられているのかということは非常に興味深い、この点は今後の課題としたい。
- 11) 高橋恵子, pp. 258-259. なお、マブイワカシについては、酒井, pp. 223-236, 櫻井, pp. 165-171 等参照。櫻井は、「マブイワカシ(魂分かし)の行事には、ユタが関与し主宰するか、あるいはしないかの区別はある。けれども、死後四十九日以内は亡者の霊が生家に留まっていて、これを冥界へ送り出すために、家族の者のイチマブイと死者のシニマブイとを訣別させる呪儀を執行しなければならないとする観念は、沖縄地区のいずれにも消えずにのこっている。」(p. 167) と述べている。
- 12) 櫻井, p. 166.
- 13) ポルトガル語については、琉球大学へのブラジルからの留学生で沖縄県系人である、城間セルソ明秀君に確認してもらった。記して感謝したい。
- 14) 野入直美, 2009, pp. 27~40 においても、ブラジルの沖縄系の人々のウチナーンチュ意識の高さが、アンケート調査に基づいて示されている。

文献

- 大橋英寿, 平成 10 年, 『沖縄シャーマニズムの社会心理学的研究』, 弘文堂.
- 婦依龍照, 2007, 『沖縄の葬式・法事・年中行事』, 那覇出版社.
- 国立国語研究所編, 平成 13 年, 『沖縄語辞典』, 財務省印刷局, 第 9 刷.
- 酒井卯作, 平成 13 年, 『琉球列島における死霊祭祀の構造』, 第一書房.
- 櫻井徳太郎, 昭和 48 年, 『沖縄のシャーマニズム』, 弘文堂.
- 高橋恵子, 1998, 『沖縄の御願ことば辞典』, ボーダーインク.
- 野入直美, 2009, 「「世界のウチナーンチュ大会」と沖縄県系人ネットワーク(4)-中南米からの参加者の特徴を中心に-」, 『移民研究』(琉球大学移民研究センター), 第 5 号, pp. 27-40.
- 半田一郎編著, 1999, 『琉球語辞典』, 大学書林.
- 平識令治, 1995, 『沖縄の祖先祭祀』, 第一書房.
- むぎ社編, 2007, 『スーコーとトートーメー』, むぎ社.
- 森 幸一, 2002, 「ブラジルにおける沖縄系シャーマン《ユタ》の成巫過程とその呪術宗教世界」, 柳田利夫編, 2002, 『ラテンアメリカの日系人』, 慶應義塾大学出版会, pp. 153-212, 所収.

(はまさき もりやす・琉球大学法文学部教授・哲学)

A Mass of *Shijyukunichi* of an Okinawan in São Paulo

Moriyasu HAMASAKI

(University of the Ryukyus)

Key Words: Mass of *Shijyukunichi*, São Paulo, *Uchinanchu* community, Okinawan Folk religion, *Yuta*

In Brazil, there are many *Uchinanchu*, having built communities of *Uchinanchu*. We conducted research on Okinawan folk religion in São Paulo in November 2009. We attended to and researched on a mass of *shijyukunichi* of a *Uchinanchu*.

This paper aims to examine, based on our research, how Okinawan folk religion is succeeded in a mass of *shijyukunichi*.

We can recognize many similarities between the way Okinawan in Okinawa reads a mass of *shijyukunichi* and the way Okinawan in Brazil does. These are the similarities: the importance of *Totome*, *Shiruife*, 49 rice cakes which represent the bones of a man, a *san* which is a talisman against an evil spirit, and *mabuiwakashi* which is a very important ritual in a mass of *shijyukunichi*, separating a spirit of the dead from the living and sending it to the next world. And *Uta*, the Okinawan shaman, reads a mass of *shijyukunichi*, in Okinawa and in Brazil too- interestingly enough, there also are *Utas* in Brazil.

In communities of *Uchinanchu* in Brazil, many *Uchinanchu* have deep concern for Okinawan traditional folk religion and believe in it in daily life.